アメリカの素顔を映すマガジン

Spring 2010

American View

アメリカン・ビュー

米国大使館

働く女性たち

Women's Empowerment

クリントン国務長官が女性のエンパワーメントについて国際的な視点で語ります。

Interview

働く女性のひとりであるスージー・ルース大使夫人に仕事と家庭の両立について聞きます。

Changing Family

変化する米国の父親・母親の役割を説明します。

Photo Essay

女性の権利に関するオバマ政権のこれまでの政策を写真で振り返ります。

From the Editor

こんにちは。新しく広報・文化交流担当公使に着任したフィリップ・ホフマンです。日本に来ることができて、とてもうれしく思います。この素晴らしい国で働き、各地を旅して、できるだけ多くの皆さんにお目にかかることを楽しみにしています。American View 春号をご紹介する前に、本誌の編集に携わってきたデービッド・マークス報道官と彼のチームに感謝の言葉を贈りたいと思います。マークス報道官は東京での任務を終え、近々日本を離れます。マークス報道官の次の任地での成功を願っています。

本号では、読者の多くが大きな関心を寄せるテーマである「働く女性たち」を取り上げます。日米いずれの国においても、近年の女性の職場進出には目覚しいものがあります。米国では、全労働者の半数近くを女性が占め、管理職、専門職およびこれに類する職業の場合はその過半数が女性です。日本でも、家庭の外で働く女性の数はこれまでになく増えています。最大手のグローバル企業の中には、経営者が女性の会社もあります。世界中の職場で男女平等を実現するには、やるべきことがたくさん残っていますが、女性はこれまでに驚くほどの前進を遂げてきました。

ヒラリー・クリントン国務長官は、昨年のアフリカ歴訪をもとに執筆した２本の寄稿で、女性のエンパワーメント（自らの潜在能力を発揮し、望む人生を送る能力を身につける過程）についてグローバルな視点で語っています。「ゴマで見たもの」では、さまざまな苦難を乗り越えてきたコンゴ東部の女性たちの強さと立ち直る力を描き、「女性は好ましい変化のけん引役」では、女性のエンパワーメントが世界の進歩と繁栄にとって重要である、というクリントン長官の信念が、アフリカでの経験によって、さらに強くなったと書いています。

働く女性はしばしば、キャリアと家庭生活の両立という課題に直面します。雇用・労働問題を専門とするカリフォルニア州の総合法律事務所のパートナー（共同経営者）であると同時に、ジョン・ルース駐日米国大使の妻でもあるスージー・ルースにとっても、仕事と家庭の両立は身近なテーマです。本号の２つ目の記事は、スージー夫人へのインタビューです。読者の皆さんからお寄せいただいた興味深い質問に対する、スージー夫人の見識ある回答を紹介します。質問の多くには、日米両国の多くの女性が、社会でいくつもの役割を果たそうと今も懸命に努力していることが如実に表れています。

３つ目は、マルゴ・キャリントン在福岡米国領事館首席領事が書いた、変化する米国の家庭に関する記事です。キャリントン首席領事はフルタイムで働く外交官であり、同時に２人の子供の母でもあります。この記事では、父親と母親のいずれもが平等に育児を担い、子供たちの生活で重要な役割を果たすために労働時間を調整している米国の例をいくつか紹介します。

最後の記事は、女性と家庭のためにオバマ政権がこれまでに取ってきた有益な対策についてのフォトエッセーです。

本号が、女性の役割の変化や、世界中の女性のエンパワーメントの実現に向けた今後の課題について考える機会になれば幸いです。クリントン長官の言葉を借りれば、「まだ先には長い道のりがあります。米国はこれからも、あらゆる国、地域、大陸における女性の権利への支持をはっきりと表明していかねばなりません」

フィリップ・P・ホフマン
広報・文化交流担当公使

American View

--2010 年 春号 --

編集・発行
在日米国大使館広報・文化交流部
〒 107-8420　東京都港区赤坂 1-10-5

本誌掲載の記事に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解を表すものではありません。本誌に掲載されている記事、写真、イラストを非営利目的で複製することはできますが、著作権上の制限が明示されている場合には、表示された著作権者の許可を得てください。

本誌に対するご意見・ご感想は、*American View* のメインページ (http://japan.usembassy.gov/american-view.html) のフォームで送信してください。

＜表紙＞「職場の柔軟性に関するホワイトハウス・フォーラム」で講演するミシェル・オバマ大統領夫人

Women's Empowerment

ヒラリー・クリントン国務長官の寄稿

「ゴマで見たもの」

私は 11 日間にわたるアフリカ訪問で、人間性の最悪の、そして最高の姿を見た。先週訪れたゴマでは、その両方を目の当たりにした。

ムグンガ国内避難民キャンプは、コンゴ民主共和国東部の州都ゴマのはずれの、火山と大きな湖が点在する地域にある。現在キャンプには 1 万 8000 人の避難民が生活している。彼らは、1998 年以降 540 万人の犠牲者を出した一連の紛争から逃れてきた。武装した反乱軍や民兵によって自分の家や村から追い立てられ、男性、女性、子供を問わず、この比較的安全な避難場所にたどり着くまで、食料や水をほとんど取ることなく、何マイルも歩き続けた。

今、彼らは、ぎっしりと並んだテントで暮らしている。生きることに必死の人もいれば、何年も残虐行為が続いた地域にまだ残る、かすかな希望の光にすがりついている人もいる。彼らの多くは、家や財産、家族、そして何より悪いことに、人間としての尊厳を奪われた。

特に女性や少女の場合は、性暴力とジェンダーに基づく暴力が戦争の手段となり、まん延したため、被害者は想像を絶する数に上る。毎月約 1100 件の性的暴行が報告されている。１日に換算すると平均 36 人が性的暴行を受けている。

非政府組織（ＮＧＯ）「ヒール・アフリカ」が運営する病院を訪問した際、妊娠８カ月で暴行された女性に会った。彼女が自宅にいると男たちが家に押し入ってきて、夫と２人の子供を外に連れ出して前庭で射殺した。家に戻ってきた彼らは、残っていた２人の子供も撃ち殺し、彼女を殴って集団で暴行した後、死んだと思って放置した。しかし彼女は死んでおらず、生き残るために力を振り絞った。そして近所の人たちが 85 キロ離れた病院へ彼女を運び込んだ。

ゴマを訪問したクリントン国務長官（中央）。ジェンダーに基づく暴力の被害者に心身の治療を提供するＮＧＯ「ヒール・アフリカ」のスタッフと（2009 年８月 11 日）

私がゴマにやってきたのは、「米国は、こうした暴行や、暴行した者、そして暴行をけしかけた者全員を非難する。これらは、人間性に対する犯罪である」という明確なメッセージを伝えるためだ。

これらの行為は、単に個人、またはひとつの家族、ひとつの村、ひとつの集団だけを傷つけるものではない。人間としての私たちをつなぐ１枚の布を引き裂くものである。このような残虐行為は、いかなる社会でも許されるものではない。これは本当に、人間性の最悪の姿である。

それでも、まだ希望がある。生き残った人々が勇気を振り絞って、生活や地域社会を再建する姿や、市民の指導者や団体が協力して、この恐ろしい災難と闘うのを見てきたからだ。そして、医療従事者が快適なキャリアを犠牲にして、傷ついた人たちを治療するのを見てきたからだ。

私はゴマで、レイプされた女性たちの傷ついた心と体を回復させるため、日々奮闘する医者や活動家に会った。多くの場合、集団暴行で、あまりに残虐なやり方だったため、こうした女性たちは妊娠できなくなったり、歩くことや働くことができなくなっていた。ゴマでヒール・アフリカを設立したリン・ルシ氏や、ブカブでパンジ病院を設立したデニス・ムクウェジ博士のように傷ついた人たちの治療に力を尽くす人々は、人間性の最高の姿を体現している。

米国はこれらの勇気ある人々と共にある。私は今週、1700 万ドルを超える新たな資金拠出を発表した。これは、コンゴ民主共和国における性的暴力およびジェンダーに基づく暴力の防止・対策を目的としており、医療、カウンセリング、経済援助、そして法的支援を提供する。300 万ドルを投じて、女性と少女の保護と性的暴力の捜査のために警官を募集・訓練する。女性と最前線で働く人たちが、写真や映像を使って虐待を報告したり、治療や法的選択肢についての情報を共有できるよう、専門家を派遣する。また、性的暴力の被害者へのさらなる支援の形を決定するために、民間の専門家や医療スタッフ、軍のエンジニアから成るチームを派遣する。

私は、コンゴ民主共和国に滞在中、カビラ大統領と性的暴力について率直な意見を交わし、性的暴力の罪を犯した者は、誰であれ、裁判にかけて罰しなければならない、と強く主張した。この罪を犯しても罰を受けなかったコンゴ軍の兵士など、犯罪者が権力ある立場にいる場合、これは特に重要な点である。

性的暴力およびジェンダーに基づく暴力の被害者を支援する強い姿勢は、私のゴマ訪問で始まったわけでもなければ、私がここを去る時に終わるものでもない。

私たちは、この暴力の根本的な原因である、コンゴ東部での長期の紛争に対処すべく一層努力している。この紛争の終結に向け、国連や他国と協力して、さらなる対策を取るつもりである。

コンゴには、「いくら長い夜でも朝は必ずやって来る」という古くからのことわざがある。コンゴ東部で女性たちが自由に出歩き、畑で作物を育て、子供たちと遊び、恐怖を感じることなく薪や水を集めることができる日は必ず来る。彼女たちは、このうえなく美しい自然と、豊かな資源のある地域に住んでいる。彼女たちは強く、立ち直る力を持っている。機会さえあれば、彼女たちは、自分たちの国を平和と繁栄に導く経済・社会的発展をけん引できる。

私たちは手を携えて、性的暴力を暗い過去の話とし、コンゴ国民が新しい時代の機会をつかむ手助けをしていく。

本稿は、2009 年 8 月 21 日に People.com に掲載されたクリントン国務長官の寄稿を翻訳したものです。

＊＊＊

ヒール・アフリカで歓迎を受けるクリントン長官（2009 年 8 月 11 日）

「女性は好ましい変化のけん引役」

私がケープタウンのビクトリア・ムセンゲ協同組合を初めて訪問したのは、1997 年のことだった。この時出会ったのが、何もない土地を新しい共同体に変えようとするホームレスの女性たちだった。彼女たちは貯金やマイクロローン（超小口融資）で得た資金を出し合い、シャベルを購入し、コンクリートを流し込み、自分と子供のために新しい家を建てた。1997 年にはわずか 18 軒だった家が、１年後の再訪時には 104 軒になっていた。そして昨日訪問した時には、かつて砂ぼこりと絶望しかなかった土地に、多数の家が建ち並ぶ村が

できていた。

ビクトリア・ムセンゲの女性たちの決断力と起業家精神は、基本的な事実を明らかにしている。それは、世界の進歩と繁栄の鍵となるのは女性のエンパワーメントである、ということだ。女性のエンパワーメントは倫理的責務であるだけでなく、経済的要請でもある。女性が権利を認められ、教育・医療・雇用面で平等な機会を与えられれば、社会・経済的進歩をけん引する存在となる。アフリカの非常に多くの地域で今日見られるように、女性が社会の隅に追いやられ、不当な扱いを受けていては、繁栄は不可能である。

私は今週、アフリカの有望さと可能性を明らかにするために、この大陸の各地を訪問している。この新しい世紀の経済的なチャンスをとらえるためには、女性のエンパワーメントが不可欠である。いかなる国も、人口の半分以上を占める女性を放置あるいは置き去りにしたまま、繁栄を行き渡らせ、治安を向上させることはできない。

進歩と経済成長の実現に向けての幅広い課題には、貿易の拡大、能力開発と機会創出のための開発戦略の実施のほか、腐敗を受け入れず、法の支配を実施し、国民のために成果を挙げる、責任ある統治の推進も含まれている。こうした政治課題をアフリカ全土で進展させるには、南アフリカの指導力が不可欠である。

南アフリカの人々には、この「女性の日」に、自らを誇りに思う理由が数多くある（訳注：８月９日は南アフリカの「女性の日」で祝日）。ジェイコブ・ズマ大統領は先ごろ、ジル・マーカス氏を南アフリカ準備銀行の総裁に任命した。南アフリカの各地で、経済発展の基礎である中小企業を経営しているのは女性である。さらに南アフリカは、サリー・マレンゴ氏やリリアン・マセベンザ氏のような活力に満ちた女性起業家たちの母国でもある。マレンゴ氏は、現在ベッドフォードビューで自動車部品を製造しているＫＰＬアルミニウム・アンド・ジンク・ダイキャスティング社の創業者であり、マセベンザ氏は、伝統的な貯蓄組合を、恵まれない女性たちが収入を得て起業できるよう支援する共同体に変えるためにマニ・ギンギ社会起業家ネットワークを設立した。

南アフリカのビクトリア・ムセンゲ協同組合の人々と写真撮影するクリントン長官（前列左から２番目）とニータ・ローウィー米国下院議員（同右端）（2009 年８月８日）

南アフリカの女性は、この国をアフリカ経済の支えとするために貢献してきた。彼女たちは、市民としての責任、法の支配の順守、そしてすべての人が参加する多様な経済を通じて何が実現可能かを示している。

女性たちは、アフリカ全土で、好ましい変化を起こす推進力となっている。ケニヤのワンガリ・マータイ氏は、環境管理の国際運動に着手した。リベリアのエレン・ジョンソン・サーリーフ氏は、かつて内戦に苦しんだ国の元首となり、女性が国の最高指導者になることができると証明した。

しかしアフリカ、そして世界中に、希望の持てる状況にない地域が多数存在する。こうした地域では、女性に資産の所有権、融資を受ける権利、結婚生活において自分で選択する権利が法律で認められていない。世界の貧困層、飢餓に苦しむ人々、教育を受けられない人々の大多数が女性である。戦争の手段としてのレイプや、いわゆる「名誉の」殺人（訳注：婚前・婚外性交渉を経験した女性を「家族全員の名誉を汚す者」として父親や男兄弟が殺す風習のこと）、傷害行為、人身売買、児童結婚、女性性器切除など、暴力的で人間をおとしめる慣習の対象となりやすい。

コンゴ東部では、紛争の手段としての性暴力およびジェンダーに基づく暴力により、想像を絶する数の女性が犠牲になっており、私は今週その被害者たちを訪問する。毎月約 1100 件の性的暴行が報告され、１日に平均 36 人の女性・少女が性

ビクトリア・ムセンゲの住宅建設現場を視察するクリントン長官（2009 年８月８日）

的暴行を受けている。

世界は、こうした悪行に対し、声を合わせてはっきりと「このような暴力行為をやめろ」と言わなければならない。

米国は、女性の権利が確実に守られ、尊重されること、女性が教育を受け、よい仕事に就き、安全に暮らし、自分の可能性を発揮する機会を得られることを目指し、アフリカ各国とのパートナーシップを発展させるべく努力している。

バラク・オバマ大統領と私は、アフリカの可能性を信じている。世界の人々は、貧困や病気、そして紛争のイメージだけでアフリカを見ることがあまりにも多い。しかし私たちには、さまざまなものを築き、創造し、繁栄する、チャンスにあふれた大陸が見える。そこは８億もの人々の故郷であり、その半数以上が女性である。

「女性の日」は、1956 年８月９日に正義を主張し行進した２万人の南アフリカの女性を記念する日である。恐れを知らぬ彼女たちが歌っていた賛歌「女性を殴ることは岩を殴ること」は、運動のスローガンになった。

女性たちは、より自由で安全で、より繁栄するアフリカを築くための礎となり得る。彼女たちに必要なのは機会だけである。

本稿は、2009 年８月９日に南アフリカのシティプレス紙に掲載されたクリントン国務長官の寄稿を翻訳したものです。

＊＊＊

Interview with Susie Roos

スージー・ルースに聞く—「働く女性たち」

スージー・ルース駐日米国大使夫人

去る２月、American View は、読者の皆さんからスージー・ルース駐日米国大使夫人への質問を募集した。その結果、日本や世界の各地から、仕事と家庭の両立など、さまざまなテーマについて興味深い質問が寄せられた。以下は、皆さんからの質問をもとにしたスージー夫人へのインタビューである。

スージー・ルースは、カリフォルニア州サンフランシスコにある雇用・労働法専門の総合法律事務所でパートナー（共同経営者）を務めており、夫が米国大使を務める東京とサンフランシスコの間を行き来している。ルース夫妻には、22 歳の娘ローレンと 17 歳の息子デービッドの２人の子供がいる。

質問　スージーさんがお手本とする人物がいますか。それはなぜですか。（東京都在住の読者から）

スージー・ルース　私は常に、素晴らしい仕事と素晴らしい家庭の両方を手に入れたいと思っていました。できないはずはない、と思っていました。男性は両方を手に入れることができるのですから、女性だってできるはずです。私の母は素晴らしいお手本です。母は子供たちが学校に入ると大学に戻り、私が大学を卒業した年に彼女も大学を卒業しました。その後、母は旅行代理店の社員としてフルタイムで働きました。彼女は常に、自分がやりたいことをしていました。専業主婦であった時も、仕事に復帰した時も、やりたいことをしていたのです。そうして母は私に、やりたいことをしている限り、あらゆる選択肢が可能であることを教えてくれたのです。

質問　雇用と労働法を専門とする弁護士になろうと思ったのは、どのようなことがきっかけでしたか。（米国在住）

スージー・ルース　私はいつも、テレビや映画で見る弁護士にあこがれていました。特に気に入っていたのは、とても人気のあった法廷ドラマに登場する弁護士、ペリー・メイスンでした。彼はいつも、番組の最後の５分間に見事な最終弁論を披露するのです。十代のころ、議論をしていつも人を納得させている私を見て、母は「弁護士になればいいのに」とよく言っていました。ですから、いつも弁護士を天職のように感じていました。スタンフォード大学でアメリカ研究の学位を取得して卒業した後、サンフランシスコにある大手法律事務所で１年間、パラリーガル（弁護士補助員）として働いたのですが、その仕事がとても楽しかったので、法科大学院に進学することにしました。法科大学院に入った時には、法廷弁護士になるつもりでいました。大学院在学中に、ロサンゼルスの法律事務所を舞台にした「ＬＡロー」という、たいへん人気のあるテレビドラマが放映されました。このドラマで描かれる弁護士の仕事が、とても刺激的で面白そうだったのです。

けれど、弁護士になろうと思ったのは、何もテレビドラマの影響だけではありません。現実はテレビとは全く違います。実は、法律問題に興味がありました。また、雇用問題を専門にすることは難しい決断ではありませんでした。現実の人間の問題を扱うことができるから、雇用問題を専門に選んだのです。例えば、勤務成績の悪い従業員への処遇について、事務所の顧客である雇用主に

1991 年に法律事務所のパートナーになった時の記念写真

助言する一方で、こうした処遇が従業員にとって公正であるようにするにはどうすればよいか、といったことです。私は、通常、雇用主や企業の代理人を務めます。ですから、特定の個人の権利を守ることはありません。でも、企業が差別や嫌がらせを禁止する法律を理解できるよう支援しており、そのことに満足しています。

質問　米国と日本を行き来して、時差ぼけで疲れを感じた時には、どのような方法で心身をリフレッシュしますか。（千葉県在住）

スージー・ルース　とても幸せなことに、時差ぼけを感じることはあまりありません。機内では、アルコール類は全く飲まず、水をたくさん取るようにしています。今のところ行き来した回数はそれほど多くありません。でも、いろいろなアドバイスをいただきました。機内では眠る方がいいと言う人もいれば、寝ないで起きているようにと言う人もいます。今のところは、雑誌や本を読んだり、映画を見たりして起きています。先日の旅はタイミングが良いことにオスカーの授賞式の直前で、機内でアカデミー賞にノミネートされた映画を何本か見ることができました。カリフォルニアに着くと、通常は午前中ですが、夜まで眠らないようにして、カリフォルニア時間に合わせるようにしています。日本に帰ってきても同様です。

質問　弁護士としてのキャリアを追求する上で、勇気づけられた言葉はありますか。（東京都在住）

スージー・ルース　「詰まるところ、重要なのは自分の評判と誠実さである」という言葉です。いつもこの助言に従って行動するよう努めています。

質問　お子さんが小さいころ、どのようにして仕事と家庭を両立させましたか。（米国在住）

職場の食事会に娘を連れていったスージー夫人（写真左端）

スージー・ルース　私にはいつも家事を手伝ってくれる素晴らしい人がいたので、とても恵まれていました。毎日私の家に通って、子供たちの世話をしてくれるベビーシッターがいました。でも、常に家族を第一に考えてきたので、主な学校行事や子供が参加するスポーツの試合には必ず行くようにしました。また、勤めていた職場が家族第一という考えを理解してくれたので、その点でも私は恵まれていました。その後、約 15 年前に自分の事務所を設立して経営者となったのですが、事務所のパートナーたちの優先順位も私と同じでした。

それでも、場合によっては妥協しなければなりません。今でも覚えているのは、娘が生まれて最初のクリスマスのことです。娘は生後 6 カ月で、私たちは家族全員でスキー旅行を計画していました。ところが、当時同僚だった弁護士が、重要な裁判の直前に事務所を辞めてしまい、私がその裁判を担当することになりました。そのような状況でスキーに行ってもいいかとパートナーに尋ねると、「自分が正しいと思うことをするように」という答えが返ってきました。そこで私たち家族は、スキー旅行を中止し、私は裁判を手伝いました。この時はそれでも家族と一緒に過ごしましたが、時には仕事の責任を果たすために妥協しなければなりません。最終的には何もかもうまく運びました。子供たちは（親の欲目かもしれませんが）立派に育ちましたし、私はパートナーになりましたから。

質問　スージーさんはさまざまな役割を担っていらっしゃいますが、怒りを感じることはありませんか。もしあれば、その怒りにどのように対処していますか。（静岡県在住）

スージー・ルース　怒りを感じたことはないですが、仕事と家庭の板挟みになれば、ある程度のストレスを感じるのは当然だと思います。そういう

時には、優先順位をつけて、最初に重要な課題に対処し、これをきちんと片付けることが大切です。重要性の低い課題は、思うようにはこなせないかもしれません。ですから、それを受け入れられるようにならなければいけません。ストレスを減らすためには、何かの活動や趣味に費やす時間をつくることが大事だと思います。例えば、芸術、スポーツ、社会的活動、読書、料理、あるいはアウトドア活動などです。時間を見つけるのは無理と感じるかもしれませんが、こうした時間を過ごした後には新たな活力が生まれ、元気を取り戻して日常の仕事に戻ることができます。

私は、毎日、少なくとも１週間のうち５日は運動するようにしています。息子を学校に送り出し、仕事に出かける準備に間に合うように家に戻るために、朝早く起きて運動します。最初のうちは早起きは大変でしたが、そうするよう自分に言い聞かせました。そこから得るメリットが、ベッドの中で余分に過ごす数分間を上回るからです。１日中爽快（そうかい）な気分を味わうことができます。

また、できるだけ多くのスポーツ・イベントに行きたいと思っています。スポーツ観戦は何でも大好きです。自分でもゴルフ、テニス、スキーをします。私は、大学の試合にもできるだけ行きたいと思っています。サンフランシスコのベイ・エリアに住んでいるので、フットボール、バスケットボール、野球など、スタンフォード大学のスポーツ・イベントはほとんど見に行くことができます。また、大リーグのサンフランシスコ・ジャイアンツの試合やプロ・バスケットボールのＮＢＡの試合の観戦も大好きです。けれど、サンフランシスコのＮＢＡチームである、ゴールデン・ステート・ウォリアーズの成績はこのところ芳しくありませんね。スポーツ観戦は私をリラックスさせてくれ、ストレス解消になります。それから、買い物も大好きなので、ウィンドーショッピングでもリラックスします。ジョンに言わせれば、私の場合はウィンドーショッピングだけでは済まないそうですが。

家族でスキーへ（写真　左から２人目よりルース大使、スージー夫人、息子のデービッド）

質問　日本にいる時にどうしても食べたくなる米国の食べ物がありますか。（千葉県在住）

スージー・ルース　日本にはおいしい食べ物がたくさんあるので、今のところ、どうしても食べたいと思う米国の食べ物はありません。日本の食べ物では特にお好み焼きが好きです。これは、米国にある日本食レストランでなじみのある、おすしやすき焼きなどの日本食とはかなり違いますね。だからと言って、おすしをたくさん食べるのをやめたわけではありません。実は、私たちは日本食が大好きなのです。

メキシコ料理を食べたいと思うことはありますね。私が住んでいたカリフォルニア州でとても人気のある料理です。帰国時に、最初に行ったのがメキシコ料理のレストランでした。チップスやサルサやエンチラーダが大好きです。でも、私がメキシコ料理のレストランに行く時の一番の楽しみは、フローズン・マルガリータです。勘違いしないでくださいね。私は大酒飲みではありませんし、だいたい１杯しか飲みません。でも、フローズン・マルガリータが大好きなので、ジョンが私の誕生日にフローズン・マルガリータ・メーカーを買ってくれたことがありました。

質問　ご主人が日本に赴任されることを初めて聞かれた時はどう思いましたか。（米国在住）

スージー・ルース　ジョンがこの機会に恵まれてとてもうれしかったですし、とても光栄なことだと思いました。ですが、家族や親せきからはるか遠く離れての外国での生活は、これまで経験したことがないので、多少の不安はありました。また、

法律事務所のパートナーを残し弁護士業から離れることも不安でした。それまで常にフルタイムで働いてきたので、職場を離れるとはどういうことかよく分からなかったのです。でも、昨年８月に日本に来てから、心配する必要は何もありませんでした。日本は信じられないほど素晴らしい。遠く離れていても事務所の仕事ができますし、すべて驚くほどうまく行っています。たいていのことは電子メールや電話で対応できますし、日常の訴訟業務は私のパートナーが処理しています。

日本着任後に訪れた明治神宮にて（左から２人目より息子のデービッド、スージー夫人、ルース大使、ローレン）

家族（特にロサンゼルスで看護師をしている娘）に会えないことはとても寂しいですが、私は自分や夫の両親と強いきずなで結ばれています。そして、幸いにも彼らは健康で、日本に私たちを訪ねて来ることができました。両親たちの訪問は、彼らにとっても私たちにとっても、とても特別な経験でした。ジョンの両親は彼と広島に行くことができました。息子のデービッドも同行しましたから、親・子・孫３世代が、あの歴史的に重要な場所を訪れたことになります。私の両親も来日し、皆で東京散策を楽しみました。素晴らしい箱根への旅では、息をのむほど美しい富士山を眺め、箱根彫刻の森美術館を見学しました。どちらの両親も、次の日本訪問をとても楽しみにしています。先日は、娘が初めて職場から休暇をもらって日本に１週間やって来たので、皆でお花見を楽しみました。

質問　私は、２人の子供が生まれてから、ほとんど休まず働いています。妊娠中も働いていました。私が働く母親として直面した最大の問題は、仕事と家庭の両立です。日本では、保育所を設置したり補助金を付与するなどして、働く母親を支える確かな制度が整備されていないため、時間配分に苦労しています。それに、良き母親でなければならない、という精神的な負担への対処がとても大変です。働く女性にとって、依然としてとても未熟な社会に住む日本の母親に何か助言はありますか。（奈良県在住）

スージー・ルース　まず、職場と家庭の両方で大変努力されているあなたは立派です。あなたがしていることは簡単なことではありません。保育所を利用できるか、手の届く料金か、という点は、米国の女性にとっても難しい問題です。簡単な解決策は思いつきませんが、日米両方の社会が、子供という私たちの最も大切な未来の資産を守っている保育士を重要な専門家として高く評価するようになれば、と思います。

良き母親でなければならないという「精神的負担」に関しては、確固たる労働観を示すことで、子供たちの良き模範となっていると考えることをお勧めします。私の子供たちは、夕食が少し遅れることに不満を言いながらも、私が仕事を持ち、事務所を経営していることをうれしく思い、私のことをとても誇りに思ってくれています。娘にとっては、私が良いお手本となったのでしょう。私と同じように専門家となり、自分自身のキャリアを歩んでいます。どうぞ、できるだけ早いうちからお子さんたちに家で手伝いをさせるようにしてください。そうすればあなたも助かりますし、お子さんたちは何かを成し遂げたという誇りを感じることができます。お子さんの性別に関係なく、あなたはお子さんに、女性は職場で平等な機会を得ることできるし、得るべきだという大切な教訓を教えているのです。

もうひとつのアドバイスとして、働く母親たちと互いに励まし合いましょう。「どうやって仕事と子育てをこなしているのかわからないけれど、あなたはとても良くやっているわね」とお友達に言えば、そのお友達が救われます。ですから、私からあなたへも同じ言葉を贈ります。「どうやって仕事と子育てをこなしているのかわからないけれど、あなたはとても良くやっているわ」

質問　仕事と家庭の両立が必要になった時、家事と育児についてご主人とどのように責任を分担したのですか。ご存知かもしれませんが、男性と同じように自分の夢を追求したいと考える日本の女性にとって最大の障害は、日本人男性の大半が、依然として家事と育児は女性の仕事と考え、その責任をすべて女性に押し付けていることです。スージーさんは、どのようにしてこの問題を乗り切りましたか。（東京都在住）

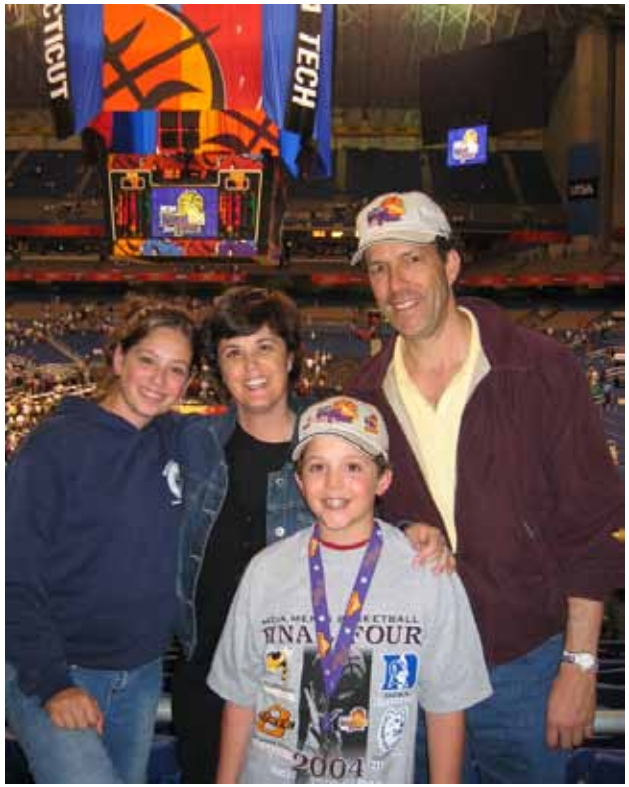
スージー・ルース　ジョンとの約束で、彼がどのように家事をこなしているかは公にしないことになっていますが、彼は子供の世話がとても好きです。子供のためなら、どんなことでも進んでやりました。これは私にとって幸いでした。それでも、何かの計画を立てたり、子供たちが何らかの活動に参加する時にその申し込みをしたり、医者の予約を取ることなどは主に私の役目でした。でも、私が子供を医者に連れて行けない時にはジョンが行きました。家事となるとまた話が違います。でも、彼は洗濯は進んでやります。幸いなことに、私には家事を手伝ってくれる人がいました。ですから、家事をすべてしなければならない女性には拍手を送ります。

質問　私は長崎市民で、長崎市と米国のセントポール市の姉妹都市活動にボランティアとして参加しています。米国での平和教育について質問したいと思います。子供たちに平和と戦争について教えるために、十分な時間が割り当てられていますか。平和的な世界の実現と子供たちの未来にとって、世界各地で子供たちに平和教育を行うことは、極めて重要であると考えます。スージーさんのご意見をぜひ伺いたいです。（長崎県在住）

スージー・ルース　あなたが姉妹都市プログラムでボランティア活動をされていると伺い、とてもうれしく思います。私は、日米間の結びつきを強める上で、姉妹都市制度に代表される個人レベルの草の根外交が真の力を発揮する、と強く信じています。米国では、公立学校制度は国レベルではなく、地方レベルで運営されています。子供たちがまだ幼かった時には、私も夫も地元の教育委員会に深く関わっていました。実は、ジョンは地元の教育委員に立候補し、８年間務めました。米国では国が決めたカリキュラムはありませんが、多くの親があなたと同じように感じていると思います。つまり、子供たちが戦争と平和について学び、歴史を理解し、子供たちに世界の平和に貢献する方法について考えさせることが重要である、と感じていると思います。

質問　妻、母、そして働く女性としての役割を、どのように切り替えていますか。そうするための特別なこつとか、バランスを取るために特にしていることはありますか。（米国在住）

スージー・ルース　私は常に、妻であり、母であり、働く女性なので、「切り替える」ということをしたかどうか、よく分かりません。また、バランスを取るための「特別なこつ」があるわけでもありません。この３つの役割を同時にこなす上で助けとなるのは、ユーモアを絶やさないことだと思います。そして、もちろん、素晴らしい夫と素晴らしい子供の存在ですね。陳腐なことを言うつもりはありませんが、妻として、母として、働く女性としての自分の能力を高く評価し、尊敬してくれる伴侶を持つことは、大きなプラスになると思います。ですから、その点では、ジョンのおかげという部分が大きいです。



テキサス州サンアントニオで開催されたバスケットボールのイベントにて

質問　飛行船に乗ったことがありますか。飛行船に乗った時の体が浮く感覚は、働く女性だけでなく誰にとっても、ストレスを解消し、全く新しい人生観を得る素晴らしい方法だと思います。飛行船ツアーを提供している場所は世界に３カ所しかありません。ひとつは、サンフランシスコで、他の２つは東京にあります。（茨城県在住）

スージー・ルース　たいへん興味深い質問ですね。実は、ジョンと私は、結婚した時に熱気球に乗りました。空中を漂いながら、結婚式を挙げたノースダコタ州のひまわり畑の上を飛ぶのは、なかなかのものでした。まだ飛行船には乗ったことはありませんが、ストレスを解消し、新たな人生観を得る何かをすることが重要だ、というご意見には賛成です。私は、飛行機や高層ビルから見渡す景色がとても好きです。飛行船に乗ることができる都市がサンフランシスコと東京だけとは知りませんでしたが、サンフランシスコも東京もとても住みやすい町だと思います。その両方を経験できる機会を与えられて、私は実に恵まれていると感じています。

＊＊＊

　質問をお寄せいただいた読者の皆さんにお礼を申し上げるとともに、すべての質問を取り上げることができなかったことをおわびします。
（編集部）

休暇を過ごすルース一家

Changing Family

アメリカの家庭の変遷

マルゴ・キャリントン
在福岡米国領事館・首席領事

マルゴ・キャリントンは、外交官としてフルタイムで働く母親である。彼女がキャリアに専念できるのは、家で就学年齢にある２人の子供を世話する夫のウィリアムのおかげである。マルゴは先ごろ、ウナ・チャップマン・コックス・サバティカル奨学金を得た。2010年７月に首席領事としての任期を終え本国に帰国するが、その後は同奨学金で、米国の家族および仕事と家庭の両立に関する問題を研究する予定である。

＊＊＊

女性のキャリアチャンスが限られている日本に駐在する米国の外交官として、私はこれまで、米国における働く女性の進出を日本の皆さんに伝えてきた。1950年に福岡で米国領事館が開設されて以来、着任した首席領事20人中、女性の首席領事は私で３人目であり、子供を持つ首席領事は私が初めてとなる。2007年の夏に着任すると間もなく、地元の女性団体から、働く母親としての私の経験をメンバーに話してほしいと依頼されるようになった。九州各地の団体で話をすることで、女性の地位向上に貢献し、仕事と家庭の両立を可能にした要因や、こうした問題に関する日本と米国の相違点をより深く理解できるようになった。

国連開発計画が毎年発行する人間開発報告書の中にある「ジェンダー・エンパワーメント指数（ＧＥＭ）」によって、女性が社会でどのくらい「エンパワー」されているか、つまり女性がその国の政治、経済、そして社会生活にどの程度参画しているかを国ごとに比較できる。ＧＥＭはまた、経済や教育の機会、政治的影響力の程度、男性と比較した場合の女性の健康と福祉といった点で、各国で男女平等がどれほど浸透しているかを測る尺度でもある。ＧＥＭは、男女間の賃金格差や、女性国会議員の数など経済・政治分野で国のトップレベルにいる女性の数といった要素をもとに算出される。女性にどの程度の経済的機会が与えられているかを決定する際には、職場での性差別を防ぐ法律や産前産後休業および育児休業に関する国の法律の有無、育児支援の利用の可否などが考慮される。

2009年、日本は国連開発計画の人間開発指数（ＨＤＩ、各国の人間開発の達成度を長寿、知識、人間らしい生活という３つの側面で測った複合的指数）で第10位にランクされ、ＨＤＩが非常に高い国のリストに入っている。しかし、ＧＥＭでは、109カ国中57番目である。ＧＥＭランキングで日本よりひとつ上の56位はキルギスで、すぐ下の58位はスリナムである。ＨＤＩが高いとされた20カ国のうち、ＧＥＭのランキングで22位を下回った国は日本だけである。日本は開発のほとんどの分野で大きな進歩を遂げているが、女性のエンパワーメントの水準は低く、その間に大きな隔たりがあることが浮き彫りになっている。

男女平等を完全に達成した国はまだなく、米国もＧＥＭランキングの上位10カ国入りしていないことも指摘しておく。米国は2009年のＧＥＭランキングで18位であった。とはいえ、近年の米国女性の進出は目覚しく、米国の政治・経済分野において一大勢力になったことは否定できない。

過去数十年間で、米国では女性の職場進出が進み、米国社会は大きく変化した。今日、女性が米国の労働人口の半分近くを占め、アメリカ進歩センターの最近の報告は、「米国の経済分野で女性は一大勢力を形成している」と指摘している。今日の米国の家庭は、ほとんどが共働きである。2007年には、未成年（18歳未満）の子供を持つ母親の63.3%が仕事を持ち、そのうち24%が、世帯所得の少なくとも25%に貢献していた（注1）。さらに1967年以降着実に高まっている傾向として、未成年の子供を持つ母親のうち39%以上が

（注1）　ヘザー・ボウシー「The New Breadwinners」。マリア・シュライバー編「The Shriver Report: A Woman's Nation Changes Everything」（2009年10月16日公表）に収録。http://www.awomansnation.com/economy.php で閲覧可能（2009年11月23日に検索）。

一家の主な稼ぎ手である(注2)。この中には、母子家庭も含まれる。こうした変化は米国の家庭生活だけでなく、米国の雇用の本質にも大きな影響を及ぼした。現在では多くの雇用主が、社内託児所の設置、育児休業の延長、より柔軟な就業スケジュールの採用など、働く母親のニーズに応えるために一層努力しており、それ以外にも、女性が仕事と家庭を両立できるような方策を取っている。こうした支援を提供した雇用主の下では常習的な欠勤が減り、従業員の定着率も高く、生産性も向上したというデータもある(注3)。

「マミートラック（訳注：子育てに有利な雇用条件を得られるが、通常は昇進機会が限られる母親用の職業コース）」なるものが存在するとの指摘もある。家族への責任を果たせる就労形態を必要とする女性は、そのために自分のキャリアを犠牲にしなければならない。雇用主が、出産や子育てのために長い休業が必要かもしれない女性の昇進に消極的だからだ。しかし実際には、米国人女性は出産の直前まで仕事を続け、出産後も数週間で職場復帰することが多く、通常それよりもはるかに長期の産前産後・育児休業を取る日本やその他先進国の働く女性との差は際立っている。その結果、米国では、このような新たな現実に対応した、より家族に配慮した政策や就労形態の必要性に関する議論が続いている。また、こうした変化を強く求めているのは女性に限らない。以下で詳しく論じるように、米国人の父親は、こうした変化に対応して、子育てに対する責任をより多く分担するようになってきている。現在米国では、働く母親、そして子育ての責任を担ってきた働く父親にとって、より一層の柔軟性が必要だという点に議論が集中する傾向がある。

熊本の女性団体の会合で話すマルゴ・キャリントン

米国では、多くの労働者が、高齢の親に対する責任を負わなければならない点についても認識が高まっている。そのため、単に「子育ての責任」ではなく、「家族を世話する責任」のような言葉が使われることが多くなっている。多くの事例では、１人の労働者が高齢の親と子供の両方を世話しており、そのため仕事と家庭の両立が米国社会の問題として顕在化してきた。その結果、この問題は、財界や労働界で議論されるだけでなく、政治課題としても取り上げられることが多くなっている。

オバマ大統領は大統領選中に、米国の勤労世帯が置かれている窮状と、育児休業をさらに延長する必要性に度々触れてきた。就任からわずか10日後には、バイデン副大統領を議長とする「中間層勤労家庭に関するホワイトハウス・タスクフォース(White House Task Force on Middle Class Working Families)」を発足させた。このタスクフォースの主な目的は、子育て世帯への金銭的支援を充実させ、高齢者を介護している世帯への支援を拡大する方策を見つけることである。2009年３月には、オバマ大統領が、「女性と少女に関するホワイトハウス評議会」を創設する大統領命令に署名した。これは、「女性と少女が直面する課題に連邦政府が連携して取り組む」ことを命じている(注4)。さらにすべての省庁に対し、その政策やプログラムが女性に、とりわけ仕事と家庭のバランスの領域でどのような影響を及ぼすかを考慮するよう求めている。

ヒラリー・クリントン国務長官は、働く母親としての自身の経験を率直に語り、米国の外交政策が女性に関する問題を重視するよう促してきた。クリントン長官は、特に、アジアをはじめとする外国の若い女性から、仕事と家庭に関する問題について質問されることが多い。2009年２月に韓国・ソウルの梨花女子大学の学生に講演した際、クリントン長官はこの問題への質問に「女性が家

(注2)　同上。

(注3)　大統領府経済諮問委員会「Work-Life Balance and the Economics of Workplace Flexibility」（2010年３月）。http://www.whitehouse.gov/files/documents/100331-cea-economics-workplace-flexibility.pdf で閲覧可能（2010年４月２日に検索）。

(注4)　大統領文書、大統領令13506、2009年３月11日。

庭と仕事を両立させることが非常に難しくなっている原因は、今も社会にあります。（中略）私の国もそうです。質の高い育児への支援はありませんし、多くの場合、勤務時間のフレックスタイム制も導入されていません。フルタイムで働く女性の多くが、母親と労働者としての義務のどちらも果たせていないと感じています。彼女たちは大変苦しんでいます。社会から広く支援を得て、ほとんどすべてのことを自力で何とかする必要がなくなれば、家庭と仕事の両立はずっと容易になるでしょう」と答えた。

米国の政府や公的機関は、米国の勤労世帯に影響を及ぼす問題に対応しようとしているが、クリントン長官が指摘するように、さらなる前進が必要である。その間、多くの家庭では、仕事の責任と、家庭生活の責任の間でバランスを保つために、自分たちなりに努力している。「平等な育児分担」とも呼ばれる動きでは、米国の多くの両親が、「育児、家事、稼ぎ手としての役割」を平等に分担し、「自分の時間」を平等に得られるよう、仕事と家庭生活のスケジュールを立てている(注5)。中には両親がともに育児と稼ぎ手としての役割を果たしていて、どちらか一方が必ず子供と一緒に家にいられるようなシフトで働き、外部の保育サービスをあまり必要としないようにしている世帯もある。共働き世帯、特に24時間休みない世話が必要な就学前の子供がいる世帯では、両親が交互に育児休業を取得して、どちらか一方が1日中子供と一緒に家にいられる期間を長くしているところもある。こうした変化はすべて、両親がより平等に育児に取り組もうとする米国の傾向を示している。育児はもはや、母親の主な責任ではなく、両親とも責任を負うべきであるという考えが次第に広まっている。

その結果、米国社会で新たな動きが生まれた。それは、母親が一家の主な稼ぎ手となる一方で、家で子供の世話をする父親「ステイ・アット・ホーム・ダッド(SAHD)」の数が増え、こうした父親が次第に受け入れられるようになったことである。一説によると、現在米国には、SAHDが100万人から200万人いる。多くの専門家は、米国の国勢調査の数字は、SAHDの数を実際よりも少なく見積もっていると考えている。2007年の国勢調査では、SAHDの数は推定16万5000人とされていた(注6)。しかしこの数字には、母親が家庭の主な稼ぎ手である一方で、父親が学生の場合や、定年退職者、あるいは自宅で非常勤の仕事をしているような事例は含まれていない。

米国では今でも男女間の賃金格差があり、2008年の女性の平均収入は、男性の77.1%でしかなかった。しかし、今では収入において男性と肩を並べ、働くことが家族の幸福への一番の貢献だと考えている女性も多い(注7)。その反面、家庭にいる方が家族に貢献できると考える父親が増えている。家で子供と一緒にいたいと考え、その機会に恵まれた父親にとって、そうすることは当然の選択である。

「ステイ・アット・ホーム・ダッド」をテーマにした会合でパネリストを務める、マルゴの夫、ウィリアム・キャリントン

米国最大のオンライン求人サイト(Careerbuilder.com)の調査では、父親全体の40～50%は、可能であれば家庭にいることを選ぶという結果が常に出ている。今では、父親がより多くの時間やエネルギーを子供に費やすため、自ら就業時間を短縮したり、新たな職責を辞退することが、非常に一般的になっている。こういう男

(注5) マーク・ヴァション、エイミー・ヴァション共著「Equally Shared Parenting: Rewriting the Rules for a New Generation of Parents」（ニューヨーク、ペンギングループ、2010年）。

(注6) 米国国勢調査局、「Parents and Children in Stay-At-Home Parent Family Groups: 1995-2007」（表67）。www.census.gov/compendia/statab/tables/09s0067.xls で閲覧可能（2009年11月23日検索）。

(注7) 女性政策研究機関(IWPR)、「Fact Sheet: Gender Wage Gap 2008」、2009年9月、http://www.iwpr.org/pdf/C350.pdf で閲覧可能（2009年11月23日検索）。

性は自ら「マミートラック」を選ぼうとしている、と言う人もいるかもしれない。しかし、ここからはっきり見えてくるのは、多くの米国人男性が、もはや一家の稼ぎ手となることだけが父親の役目ではないと考えているということである。これは、多くの米国人女性が、家での育児だけが母親の役割ではない、と考えるのと同様である。

米国では、育児を平等に分担し、両親共に子供の生活の中で重要な役割を果たせるように、さまざまなやり方で仕事のスケジュールを調整する親が増えている。職場と家庭で交代で働くことで、一家の稼ぎ手と育児の役割を平等に担っている夫婦もいる。多くの場合、一方の親が夜働き、もう一方が子供と家にいる。そして、朝になって一方の親が仕事に出かける時には、夜勤の親が子供と家にいる。このためには、極めて忙しいスケジュールをこなさなければならないことが多いが、育児を人任せにせずに親自身がその役割を担えるし、低所得世帯の場合には、この選択肢しかない場合もある。

育児と生計を支える責任を平等に分担するが、その時期が異なる親もいる。この場合は、両親が交互に育児休業を取るが、通常は母親が出産直後に育児休業を取り、母親が職場復帰すると父親が休暇を取る。このような家庭で育った子供の男女の役割に対する考え方は、父親が主な稼ぎ手という、より「伝統的な」家庭で育った子供と大きく異なる。こうした経験は新世代の子供たちに影響を与え、彼らが成長し、一家の稼ぎ手と親の役割を担う時には、家庭生活に対する新たな考えを持つようになるだろう。

現代の米国人は、男女を問わず、男女の役割について、これまでよりも寛容で柔軟な姿勢を示しており、両親ともに育児により深く関わろうとしている。そのため、米国の家庭生活の質は飛躍的に向上した。今や米国の制度は、このような変化に対応し続ける必要があり、さらにうまく仕事と家庭を両立させたいという父親・母親双方からの要求に応えなければならない。

私は、日本の政界・財界の指導者や諸機関が、日本の家庭が直面する多くの課題を検討し、仕事と家庭の両立を支援する方策を見つけることを願っている。そうすることで、労働力不足が伴う高齢化社会など、日本が将来直面する課題に、より的確に対処することができるだろう。一方で、職場でより平等な機会を得ながら、育児に伴う非常に重大な責任と大きな喜びをもっと平等に分かち合うために、どのように仕事と家庭生活を調整すべきかを、日本の母親と父親にも考えてもらいたいと思っている。

Photo Essay

フォトエッセー
オバマ政権と女性の権利

女性と少女に関する評議会

2009 年 3 月 11 日、オバマ大統領は、「女性と少女に関するホワイトハウス評議会」を設置する大統領令に署名した。この評議会は、あらゆる年代の女性が直面する問題への各政府機関の取り組みを監督することを目的としている。署名に先立ち、大統領は自身の人生にかかわりのあった女性たちについて語った。

「私は単に大統領としてだけではなく、息子として、孫として、夫として、そして父親として、この大統領令に署名しました。私は、自らの力で学校を卒業し、人を助けたいという熱い思いに突き動かされる母の姿を見ながら成長しました。同時に、勉強しながら家計をまかない、妹と私を養育することに腐心し、誰にも頼らず私たちを育ててくれた母の苦労も見てきました。また祖母が苦労して、ハワイ州初の女性の銀行幹部の１人になる様子も見てきましたが、それはまた、祖母が『ガラスの天井』に行く手を阻まれる、つまり祖母よりも能力的に優れているわけではない男性たちが、次々に祖母の先を越して昇進するのを見ることでもありました。ミシェルはオバマ一家を支える土台ですが、私は、彼女が誰よりも巧みに、そして優雅に、仕事と子育てを両立させるのを見てきました。しかし、時にはそれがどれほどミシェルを苦悩させるかを、つまり娘たちのそばにいる時には仕事のことを心配し、仕事をしている時には娘たちのことを心配する様子を見てきました。私も毎日、そうした思いでいます」

＊＊＊

公平賃金法

就任からわずか 10 日後に、オバマ大統領が大統領として初めて署名した法律は、性別、人種、年齢に関係なく正当な賃金の支払いを促すことを目的とする「2009 年リリー・レッドベター公平賃金法」だった。大統領は、この法律の名前の由来となっているリリー・レッドベターさんについて次のように説明した。「彼女は熱心な労働者として、20 年近くの間、自分の仕事を立派に勤めた後に、長年彼女に支払われてきた賃金が、全く同じ仕事をしていた男性の同僚よりも少なかったことを知ったのです」

＊＊＊

職場の柔軟性に関するフォーラム

2010 年 3 月 31 日、ミシェル・オバマ大統領夫人は、大統領、大統領夫人、ならびに「女性と少女に関するホワイトハウス評議会」が主催した「職場の柔軟性に関するホワイトハウス・フォーラム」で講演し、米国の働く男性・女性が、家庭のニーズを犠牲にすることなく仕事上の責任を満たすことができる職場慣行をつくることの重要性を説いた。ミシェル夫人は、「柔軟な雇用方針により、従業員の生産性は低下するのではなく、むしろ向上します」と言い、「従業員は、家で何か起きているのではないかと心配しながらオフィスで時間を過ごす代わりに、仕事に集中するために必要な支援や精神の安定を得られるので、家族にとっても、会社の損益にとってもプラスです」と付け加えた。

オバマ大統領は、「職場の柔軟性は女性だけの問題ではありません。家族の幸福と企業の成功にも影響を及ぼす問題です」と力説した。そして「今日のグローバル経済で競争するために必要な、未来に向けた職場や仕事を創出できるかどうかは、米国経済の強さに影響を及ぼします」と付け加えた。

フォーラムに合わせ、大統領経済諮問委員会は、職場の柔軟性がもたらす経済効果（欠勤の減少、離職率の低下、従業員の健康の改善、生産性の向上）に関する報告書を公表した。この報告書はオンラインで入手可能 (http://www.whitehouse.gov/files/documents/100331-cea-economics-workplace-flexibility.pdf)。

＊＊＊

国際勇気ある女性賞

2010 年 3 月 10 日に国務省で行われた授賞式で、ミシェル・オバマ大統領夫人とヒラリー・クリントン国務長官は、世界各地で人権活動に従事する 10 人の女性活動家に今年度の「国際勇気ある女性賞」を贈り、彼女たちの功績をたたえた。国務省初の国際女性問題担当の無任所大使に任命されたメラニー・バービー大使は、「この 10 人の女性たちは、個人的に直面した困難、脅威、逮捕、暴行に打ち勝ち、人権活動に身を投じてきました」と述べた。「政治問題で女性の意見が取り入れられることの少ないアフガニスタンでの女性の発言権を強化する取り組みから、ジンバブエでの人権侵害の立証まで、この勇敢な女性たちは、世界中で自由と平等を拡大することを生涯の仕事としています」

ミシェル夫人は、受賞者たちが危険を冒し、自ら進んで耐えようと思う人がいないほどの苦難に耐えたことを称賛した。ミシェル夫人は、会場の招待客の中に、ホワイトハウスの指導教育プログラムに参加する若い女性がいることにも触れた。同プログラムでは、地元の高校に通う若い学生とホワイトハウス職員にペアを組ませ、職員が学生を１年間指導する。

オバマ夫人は若い女性たちに「よく聞いてください。この女性たちが過酷な脅威に耐えることができたのであれば、きっとあなたたちにもできるはずです。（中略）世の中に影響を及ぼす行動を起こすには若すぎる人は、ここにはひとりもいません」と語った。そして、勇気ある女性賞受賞者から何かを感じ取ってほしい、と米国の若い女性たちに訴えた。

＊＊＊